

公開講演会

今なぜ「地球憲章」か  
—われわれ市民の意識革命と行動—

講演者：広中和歌子（参議院議員・元環境庁長官）

日時：2001年11月19日（15:40-17:00）

場所：本館 262

20世紀はどのような世紀であったか。それは、経済発展や医療の進歩・寿命の伸びを実現させた半面、戦争の大規模化・環境問題・人口増加・貧富の格差の拡大をもたらした「科学技術の進歩」の世紀であった。特に、環境問題においては、産業規模の拡大と人口増加により、一層多くの汚染が発生し、大量生産・大量消費・大量廃棄による都市型公害から、地球温暖化や砂漠化、食料・水問題などの地球規模問題へとつながった。

貧困、紛争、環境劣化という悪循環に陥っている今日の状況への対応として、ローマクラブの「成長の限界」の発表（1972）や、地球サミットの開催（1992）が実現し、持続可能な開発がテーマとなった。Think Globally, Act Locally という標語や、温暖化防止条約などの国際条約、そして、アジェンダ21を生んだ地球サミットであったが、人々の考え方の変革に必要な地球憲章は構想段階にとどまった。そのため、95年に、モーリス・ストロングやゴルバチョフ、ルベルスが中心となり、地球憲章を作成するため、ハーグのピースパレスで地球憲章委員会を立ち上げた。その後、リオ+5で、ベンチマークドラフトが完成し、さらに、ピープルズチャーターにするため、世界中から意見を求めた。日本においては、グリーンクロスジャパンがイニシアティブをとるなどして、様々な国の多くの人々の意見が取り入れられ、哲学者スティーブン・ロックフェラーにより書き

上げられた。この憲章は、2000年3月にパリのユネスコ本部で完成し、6月にピースパレスで正式発表された。

作成までが第一段階だとすれば、現在は次の段階がはじまっており、来年のヨハネスブルクサミットに向けて、地球憲章を世界中に広めようという動きがある。例えば、11月28日には、ブリスベンにおいて2001年アジア・パシフィック地球憲章コンファランスが開催され、来年には、フランスのリオンで、フランス政府の支援の下での会議も予定されている。また、日本においても有識者やビジネス界、NGOの力を借り、この憲章を広めていく為、地球憲章推進日本委員会が結成された。

持続可能な開発に向けての価値や原則を謳い、行動規範を作るというこの地球憲章は、まさに、どの宗教の中心にも流れる哲学、思想と共通のものではないかと思われる。それは、人類が多種多様な種の一つに過ぎず、自然の中で生かされているということを謙虚に認識するところからはじまり、この地球に生を受けた以上、人間は互いに、そして他の種に対して地球規模の義務と責任を感じなければならないということを謳っている。日常では忘れがちな、このような基本的な事柄を、地球憲章を読むことで思い出し、全ての人々がこのような感覚を持って日々暮らすことで、世界が変わっていくことを希望している。